

Some Remarks on Stabilization of Infinite-Dimensional  
Control Systems via a Functional Observer

熊本大学工学部 南部隆夫 (Takao Nambu)

無限次元系の安定化には，無限次元性ゆえに起こる様々な  
障害がある． Hilbert 空間  $H$  における方程式

$$\frac{dx}{dt} = -Lx + \sum_{k=1}^M f_k(t) \psi_k, \quad t > 0, \quad x(0) = x_0 \quad (1)$$

を考えよう．ここで， $L$  は稠密な定義域  $\mathcal{D}(L)$  をもつ  $H$   
の線形閉作用素で， $-L$  は  $C_0$  半群  $e^{-tL}$  の生成作用素で  
ある．観測（出力）は有限個であり

$$(x(t), g_k)_H, \quad 1 \leq k \leq N \quad (2)$$

で与えられるとするが，境界制御系を扱う場合には少し異な  
った形をとる．ここで， $g_k$  は観測の重みベクトルである．  
我々の問題は

$g_k, \psi_k$  が与えられたとき， $f_k(t)$  を (2) の実現可能な  
フィードバックとして設計し，制御系 (1) の解  $x(t)$  が

時間とともに指数関数的に減衰するようにすることである。  $g_R, \varphi_R$  の少なくとも一方が自由に設計できるベクトルであるときは、有限次元系の問題に帰着され、

$f_R(t) = (x(t), g_R)_{H_1}, \quad 1 \leq R \leq M (= N)$  として適当な代数的条件のもとで安定化が実現できる。 そうでない場合（それがこれからの主題であるが）、  $f_R(t)$  はつぎの Hilbert 空間  $H_1$  における方程式（オブザーバ）の出力として安定化を図る：

$$\begin{cases} f_R(t) = (v(t), p_R)_{H_1}, & 1 \leq R \leq M, \\ \frac{dv}{dt} = Bv + \sum_{R=1}^N (x(t), g_R)_{H_1} \xi_R + \sum_{R=1}^M f_R(t) \alpha_R, & (3) \\ v(0) = v_0. \end{cases}$$

ここで、  $B$  は安定な  $C_0$  半群  $e^{tB}$  の生成作用素であり、  $\xi_R, \alpha_R$  は制御器、  $p_R$  は観測の重みベクトルである。 方程式 (1), (3) をまとめて

$$\frac{d}{dt} \begin{bmatrix} x \\ v \end{bmatrix} = \mathcal{M} \begin{bmatrix} x \\ v \end{bmatrix}, \quad t > 0, \quad \begin{bmatrix} x(0) \\ v(0) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} x_0 \\ v_0 \end{bmatrix}$$

と書く。  $H_1$  は無限次元（可算）ではあるが、これから扱う問題に対しては有限次元系におとすことができる。 そのときオブザーバはつぎのように書ける：

$$f_k(t) = (y(t), p_k)_{\mathbb{R}^S}, \quad (4)$$

$$\frac{dy}{dt} = \mathcal{F}y + \sum_{k=1}^N (x(t), g_k)_H \xi_k + \mathcal{G}y, \quad y \in \mathbb{R}^S.$$

以後，作用素  $L$  はつき"の条件 (A) を満たすと仮定する:

$$(A) \left\{ \begin{array}{l} \text{resolvent } (\lambda - L)^{-1} \text{ は compact であり, 角領域} \\ \Sigma = \{ \lambda = \mu - b ; |\arg \mu| \leq \alpha \}, \quad 0 < \alpha < \frac{\pi}{2}, \\ b > 0, \text{ 以外で存在し} \\ \\ \|(\lambda - L)^{-1}\|_{\mathcal{L}(H)} \leq \frac{\text{const}}{1 + |\lambda|}, \quad \lambda \in \Sigma^c \end{array} \right.$$

なる評価をもつ。

このとき， $e^{-tL}$  は解析半群となる。

オブザーバ (3) の係数作用素  $B$  にはほかにも与え方はあるが [2~4], ここではつき"のように与える:

$H_0$ ; 可算 Hilbert 空間,  $A$ ; 稠密な定義域  $\mathcal{D}(A)$  をもつ  $H_0$  の正定値自己共役作用素で, compact resolvent をもつ. したがって,  $A$  に対する固有系が存在する.

$$\left\{ \begin{array}{l} 0 < \mu_1 < \mu_2 < \dots < \mu_i < \dots \longrightarrow \infty, \\ A \zeta_{ij} = \mu_i \zeta_{ij}, \quad i \geq 1, \quad 1 \leq j \leq n_i (< \infty), \\ \{ \zeta_{ij} \}; \text{ a complete orthonormal system in } H_0. \end{array} \right.$$

$0 < a < 1$  とし,  $H_1 = \mathcal{D}(\sqrt{A}) \times H_0$  における作用素

$$B = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ -A & -2a\sqrt{A} \end{bmatrix}, \quad \mathcal{D}(B) = \mathcal{D}(A) \times \mathcal{D}(\sqrt{A})$$

を考える. 容易にわかるように

$$\sigma(B) = \{ \sqrt{\mu_i} \omega^\pm; i \geq 1 \}, \quad \omega^\pm = -a \pm \sqrt{1-a^2} i,$$

$$B \eta_{ij}^\pm = \sqrt{\mu_i} \omega^\pm \eta_{ij}^\pm, \quad \eta_{ij}^\pm = \frac{1}{2\sqrt{\mu_i}} \begin{bmatrix} \zeta_{ij} \\ \sqrt{\mu_i} \omega^\pm \zeta_{ij} \end{bmatrix}.$$

後に必要となる条件  $\sigma(-L) \cap \sigma(B) = \emptyset$  が成り立つように

$a$  を小さくとって  $\tan^{-1}(\sqrt{1-a^2}/a) > \alpha$  としておく.

$\mu_i$  は大きくとっておけばよい.  $H_1$  の各ベクトル  $\eta$  は

$$\eta = \sum_{i,j} h_{ij}^+ \eta_{ij}^+ + \sum_{i,j} \overline{h_{ij}} \eta_{ij}^-$$

と一意に展開されるが, とくに  $h_{ij}^+ = \overline{h_{ij}}$  for  $\forall i, j$  と

なる  $\eta$  の集合  $\hat{H}$  は実 Hilbert 空間になる.  $B;$

$\mathcal{D}(B) \cap \hat{H} \rightarrow \hat{H}$  に注意する.  $\xi_k, \alpha_k, \rho_k$  は  $\hat{H}$  の

ベクトルとして考える.  $e^{tB}$  が解析半群であることから,

作用素  $\mathcal{M}$  は  $H \times H_1$  における解析半群  $e^{t\mathcal{M}}$  の生成

作用素である.

条件 (A) を満たす作用素  $L$  は具体的に述べるといえば, 滑ら

かな境界  $\Gamma$  をもつ有界連結領域  $\Omega \subset \mathbb{R}^n$  における 2

階一様楕円形作用素  $\mathcal{L}$  からつくられる場合である。即ち

$$Lu = \mathcal{L}u, \quad u \in \mathcal{D}(L),$$

$$\mathcal{L}u = -\sum_{i,j} \frac{\partial}{\partial x_i} \left( a_{ij} \frac{\partial u}{\partial x_j} \right) + \sum_i b_i \frac{\partial u}{\partial x_i} + cu,$$

$$\mathcal{D}(L) = \left\{ u \in H^2(\Omega); \frac{\partial u}{\partial \nu_L} + \sigma(\xi)u = 0, \xi \in \Gamma \right\}.$$

この場合,  $\sigma(L)$  は実軸の  $+\infty$  に漸近する放物線の内部に存在する。つぎの境界制御系

$$\left\{ \begin{array}{l} \frac{\partial u}{\partial t} = -\mathcal{L}u, \\ \frac{\partial u}{\partial \nu_L} + \sigma(\xi)u = \sum_{k=1}^M f_k(t) h_k(\xi), \end{array} \right. \quad (1)'$$

$$u(0, x) = u_0(x),$$

$$\text{観測}; \quad (u(t, \cdot), w_k)_\Gamma, \quad 1 \leq k \leq N \quad (2)'$$

を考える。  $x(t) = L_c^{-1/4-\varepsilon} u(t, \cdot)$ , ( $L_c = L + c$ ,  $c >$

$b$ ) とおくと, (1)', (2)' はそれぞれ (1), (2) にうつされる。

ただし,  $\psi_k \longrightarrow L_c^{3/4-\varepsilon} \tilde{\psi}_k$ ,  $(x(t), g_k)_H \longrightarrow$

$(L_c^{1/2+2\varepsilon} x(t), L_c^{*3/4-\varepsilon} \tilde{g}_k)$  とおきかえる。  $\tilde{\psi}_k$ ,  $\tilde{g}_k$  は

それぞれ  $h_k$ ,  $w_k$  により一意に定まる  $H^2(\Omega)$  の関数で

ある。

条件 (A) が成り立つ系に対してこれまで得られた結果を制御系 (1)', (2)' を例にとり述べてみよう.  $\operatorname{Re} \lambda_i < \beta$  ( $\beta > 0$ ) とする  $\lambda_i \in \sigma(L)$  を  $\lambda_1, \dots, \lambda_K$  とする. 各  $\lambda_i$  に対する  $L$  の広義固有空間の次元とその基をそれぞれ  $m_i, \varphi_{i1}, \dots, \varphi_{im_i}$  とする.  $E_K$  を  $L$  の固有値  $\{\lambda_1, \dots, \lambda_K\}$  に対応する射影作用素とし, 不変部分空間  $E_K L^2(\Omega)$  への  $L$  の制限を  $L_1$  とする. 作用素  $B$  の固有値  $\{\sqrt{\mu_k} \omega^\pm\}$  については

$$0 < \exists \gamma < 2; \quad \sqrt{\mu_k} \leq \text{const } k^\gamma, \quad k \geq 1 \quad (5)$$

が満たされると仮定する.  $\beta > a\sqrt{\mu_1}$  とするよう  $\beta$  を選んでおく. このとき

Theorem 1 [3].  $(-L_1, E_K L_c^{\frac{3}{4}-\varepsilon} \tilde{\varphi}_k)$  が可制御対となるように  $n_1, \dots, n_M$  が選ばれているとする.

$$\operatorname{rank} W_i = m_i, \quad 1 \leq i \leq K, \quad W_i = \left[ (w_k, \varphi_{ij})_{\Gamma}; \begin{array}{l} k \downarrow 1, \dots, N \\ j \rightarrow 1, \dots, m_i \end{array} \right],$$

$$\operatorname{rank} \Xi_i = N, \quad i \geq 1, \quad \Xi_i = \left[ \begin{array}{l} \xi_{ij}^{k+} \\ j \rightarrow 1, \dots, n_i \end{array}; \begin{array}{l} k \downarrow 1, \dots, N \end{array} \right] \quad (6)$$

が成り立てば, 適当な  $\alpha_k, \rho_k \in \hat{H}$  が存在して

$$\| e^{t\mathcal{M}} \|_{\mathcal{L}(L^2(\Omega) \times H_1)} \leq \text{const } e^{-a\sqrt{\mu_1} t}, \quad t \geq 0.$$

さらにこのとき，オブザーバ (3) は有限次元系 (4) におとす  
 ことができ，最終的につぎの評価を得る：

$$\left\| \begin{bmatrix} u(t, \cdot) \\ y(t) \end{bmatrix} \right\|_{L^2(\Omega) \times \mathbb{R}^S} \leq \text{const } e^{-a\sqrt{\mu_1} t} \left\| \begin{bmatrix} u_0 \\ y_0 \end{bmatrix} \right\|_{L^2(\Omega) \times \mathbb{R}^S}, \quad t \geq 0.$$

ここで問題になるのは仮定 (5) であって， $\gamma$  が小さければ  
 $B$  の固有値間の gap が接近する。即ち  $\inf_{\mathbb{R}} (\sqrt{\mu_{k+1}} - \sqrt{\mu_k}) = 0$  であるから，仮定 (6) の後半の部分が容易にこ  
 められる。 $\gamma \geq 1$  にとればそれは回避できるが，もっと大  
 きく  $\gamma$  をとれるか？ という疑問がわいてこよう。それは  
 ある種のクラスの作用素  $L$  をもつ系に対しては可能である。

$\Omega (\subset \mathbb{R}^n)$  を有界連結領域， $\mathcal{L}$  を  $\Omega$  における  $2m$   
 階楕円形作用素とし，係数は必要を滑らかさをもつとする。  
 $\mathcal{L}$  は形式的に自己共役であり， $L^2(\Omega)$  の非有界自己共役作  
 用素  $L$  が存在して

$$\begin{aligned} Lu &= \mathcal{L}u, \quad u \in \mathcal{D}(L), \\ C_0^\infty(\Omega) &\subset \mathcal{D}(L) \subset H^{2m}(\Omega) \end{aligned} \tag{7}$$

となるものとする。このとき， $L$  は compact resolvent を

もち,  $\sigma(L)$  は重複度有限の固有値のみから成る:

$$\lambda_1 < \lambda_2 < \dots < \lambda_k < \dots \longrightarrow \infty,$$

$$L \varphi_{ij} = \lambda_i \varphi_{ij}, \quad i \geq 1, \quad 1 \leq j \leq m_i (< \infty),$$

$\{\varphi_{ij}\}$ ; an orthonormal complete system in  $L^2(\Omega)$ .

各  $x > 0$  に対して

$$N(x) = \sum_{i \in I_x} m_i, \quad I_x = \{i \in \mathbb{N}; \lambda_i < x\}$$

とおくと, よく知られているように [1]

$$\exists c_0 > 0; \quad N(x) = c_0 x^{\frac{n}{2m}} + o(x^{\frac{n}{2m}}) \quad \text{as } x \longrightarrow \infty \quad (8)$$

が成り立つ. この評価より, 重複度  $m_i$  の分布には無関係につきの関係が成り立つ:

Lemma 2.  $k \longrightarrow \infty$  のとき,  $\lambda_k$  は評価

$$\text{const } k^{\frac{2m}{n}} \leq \lambda_k \leq \text{const } c^k$$

を満たす.  $c > 1$  は任意に 1 に近くとれる.

我々は  $\{\lambda_k\}$  に関するつきのような追加的な情報が利用できる場合を考察する:

$$\exists c_1 > 0; \quad \lambda_{k+1} - \lambda_k \geq \text{const } e^{-c_1 k}, \quad k \longrightarrow \infty. \quad (9)$$



(8) を満たす単調増加列  $\{\lambda_k\}$  に対して, (8) からはこの評価は従わないことに注意する. このとき, オブザーバ側の仮定は (5) のかわりに

$$0 < \gamma < \frac{2m}{n} ; \quad \sqrt{\mu_k} \leq \text{const } k^\gamma, \quad k \geq 1 \quad (5')$$

とする. これは  $2m/n > 2$  のときには (5) よりもゆるい仮定, したがって, 作用素  $B$  の固有値間の *gap* が十分大きくとれることを示している. (9), (5)' の仮定のもとでは, つぎの *Thm. 1* の一般化を得ることができる.

Theorem 3. つぎの代数的条件が成り立つとする:

$$\text{rank } \Psi_i = \text{rank } G_i = m_i, \quad 1 \leq i \leq K,$$

$$\text{rank } \Xi_i = N, \quad i \geq 1,$$

ただし,

$$\Psi_i = \left[ \begin{array}{c} (\psi_k, p_{ij}); \quad k \rightarrow 1, \dots, M \\ j \downarrow 1, \dots, m_i \end{array} \right], \quad G_i = \left[ \begin{array}{c} (g_k, p_{ij}); \quad k \rightarrow 1, \dots, N \\ j \downarrow 1, \dots, m_i \end{array} \right].$$

このとき, 適当な  $\alpha_k, \rho_k \in \hat{H}$  が存在して

$$\| e^{t\mathcal{M}} \|_{\mathcal{L}(L^2(\Omega) \times H_1)} \leq \text{const } e^{-\alpha \sqrt{\mu_1} t}, \quad t \geq 0.$$

*Thm. 1* と同様にして, オブザーバ (3) は (4) におとすことができる. (1), (4) をまとめて

$$\frac{d}{dt} \begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix} = \mathcal{N} \begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix}, \quad \begin{bmatrix} x(0) \\ y(0) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} x_0 \\ y_0 \end{bmatrix}$$

と書くことにすれば, 評価

$$\| e^{t\mathcal{N}} \|_{\mathcal{L}(L^2(\Omega) \times \mathbb{R}^S)} \leq \text{const } e^{-a\sqrt{\mu_1}t}, \quad t \geq 0$$

を得る.  $\mathcal{N}$  は compact resolvent をもつことが示される. 上の評価式より  $\sigma(\mathcal{N}) \subset \{ \lambda; \operatorname{Re} \lambda \leq -a\sqrt{\mu_1} \}$  であるが, さらにつぎの結果が成り立つ:

Lemma 4. 作用素  $\mathcal{N}$  の固有値が直線  $\operatorname{Re} \lambda = -a\sqrt{\mu_1}$  上にあったとしても, その点における  $(\lambda - \mathcal{N})^{-1}$  の極は 1 位である.

この Lemma により容易につぎの結果を得る:

Proposition 5. 各整数  $k \geq 1$  に対して, 評価

$$\| \mathcal{N}^k e^{t\mathcal{N}} \|_{\mathcal{L}(L^2(\Omega) \times \mathbb{R}^S)} \leq \text{const } \max(t^{-k}, 1) e^{-a\sqrt{\mu_1}t}, \quad t > 0$$

が成り立つ.

Prop. 5 を  $k=1$  のときに用いると, つぎの結果が成り立つことがわかる:

Corollary 6. Thm. 3 の仮定のもとでは

$$\|x(t)\|_{\mathcal{D}(L)} \leq \text{const } e^{-a\sqrt{\mu_1}t} (\|x_0\| + |y_0|), \quad t \geq 1$$

が成り立つ。

追記. 筆者は最近になって、つぎのようなより強い結果を得た:

Thm. 3 を得るためには、作用素  $L$  の固有値間の *gap* に対する仮定 (9) は取り除くことができる。さらに、オブザーバ側の仮定 (5)' において、 $\gamma$  は任意の正数でよい。

この主張により、安定化に際して作用素  $L$  の固有値に関する完全な情報を得る必要はなくなり、また、オブザーバ側に対する制約が大巾にゆるめられたことになる。

References

1. S. Agmon, "Lectures on Elliptic Boundary Value Problems," Van Nostrand, Princeton, N. J., 1965.
2. T. Nambu, On the stabilization of diffusion equations: Boundary observation and feedback, J. Differential Equations 52(1984), to appear.
3. T. Nambu, On stabilization of partial differential equations of parabolic type: Boundary observations and feedback, submitted.
4. Y. Sakawa, Feedback stabilization of linear diffusion systems, SIAM J. Control & Optimization 21(1983), 667-676.
5. R. F. Curtain, Finite dimensional compensators for parabolic distributed systems with unbounded control and observations, to appear in SIAM J. Control & Optimization.

January 23-26, 1984, in "Mathematical Theory of Control and Systems" at Kyoto University